

発刊の辞

「筆といへば熊野を思い、熊野といへば筆を想ふ」わが郷土熊野町は、げに天下に冠たる筆の都である。実に熊野町は筆とともに生き、筆とともに発展してきた町であり、毛筆文化淵田の地として広く世人から矚目せられている。

この度、熊野商工会において郷土誌を発刊することになった。温故知新という言葉があるが、この言葉は不断に進転せんとする人々や社会にとつては欠くことのできない生活の意識であり、教訓であり、歴史上の法則でもある。歴史は再生するといわれるが、それはこの立場を強調したものであり、われわれが郷土誌を発刊する所以も実はこゝにある。

われわれの生活は恵まれ過ぎていたと言えない。商工会を含めて熊野町全般に就いてもそのことは言えよう。しかし、われわれは、われわれの今日あること、そしてわれわれの生活の基盤が遠く祖先の暖い血のにじむ汗の賜であることを知っている。郷土誌の編集を通して祖先の生活にじかに触れ、その尊い遺産を景仰し意義づけることは、われわれの生活をより充実化し、より生命感に溢れさせてくれるに相違ない。

最近、毛筆の現状とその足跡を尋ねて来町する人が多い。われわれは郷土の実態・就中毛筆や画筆の真姿にこめられた郷土熊野町の息吹きを全国の方々に紹介することは、われわれに課せられた一つの義務であり、毛筆文化の昂揚の爲にもさゝやかな意義を持つと信じ、あえてこの冊子を大方

の批判に供し、御叱教を得たいと思つている。

ともあれ、郷土誌の発刊は商工会として欣快に堪えない。しかし、めでたく発刊の運びとなるまでの町当局、商工会の方々、貴重な資料を提供せられた町内外の有志各位、困難な編集の事業に献身せられた中学校の片川、登里を中心とした諸先生、さらに採算を無視して印刷の業務に専念せられた広島紙業株式会社等の御好意と御努力に対して深甚なる謝意を表して発刊の辞としたい。

昭和三十四年二月

熊野町商工会長

高 本 正